様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２６０３

研究課題名（和文）宗教と世俗の境界の編成過程に関する人類学的研究：タイ寺院の「難民」の生活実践より

研究課題名（英文）An Anthropological Study on a Process of Making the Interface between "Religious" and "Secular": a Case Study of Everyday Practices among "Refugees" at Buddhist Temples in Thailand

研究代表者
岡部　真由美（OKABE, Mayumi）

中京大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：４０５９５４７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、ミャンマー・シャン州からタイ都市部の仏教寺院へ流入する「難民」の生活実践に焦点を当てて、現代社会における宗教－世俗の境界が編成される過程を民族誌的に解明した。シャン「難民」－在家者であれ、出家者であれ－は寺院という物理的な空間に居住することで、個々の生存上のニーズを充足するために多様なアクターとの結びつきながら実践を展開するとともに、その実践を規定する法や規範をつくりかえながら宗教－世俗の境界を編成している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義は、宗教研究の主要な課題の一つであった、近現代の社会変動のなかで宗教－世俗の関係を把握し、分析するための視点と方法として、民族誌的アプローチの有効性を提示できたことにある。また、本研究の社会的意義は、通時的にも共時的にも人間社会に普遍的にみられる、宗教空間の庇護性の持続・変容のメカニズムを解明したことにある。これらの意義は、今後、1）隣接する分野との対話の可能性を拓き、2）宗教と社会のより良いあり方を探求することに役立つと考えられる。

研究成果の概要（英文）：　Focusing on the life practices of "refugees" from the Shan State of Myanmar who flowed into Buddhist temples in urban Thailand, this study ethnographically clarifies how the interface between religious-secular has been composed in contemporary society. By residing in the physical space of temples, Shan "refugees," whether lay or ordained, develop practices in association with diverse actors in order to satisfy their needs for living while at the same time reorganizing the laws and norms that govern their practices and recreating the interface between religious and secular.

研究分野：文化人類学

キーワード：宗教－世俗　境界　上座部仏教　寺院居住（寺住まい）　移民・難民　制度　アカウンタビリティ　タイ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## １．研究開始当初の背景

宗教－世俗の関係を問うことは、現実の社会に存在する宗教（宗教者ないし宗教組織）にとって、不可避かつ本質的な問題である。また、体系的な教義を有し、近代国家の法制度の枠組みと不可分な制度宗教にとってはとりわけ重要な問題である。したがって、人類学の宗教研究は、近現代の社会変動を生きる人間にとって「宗教とは何か」を考究するにあたって、民俗宗教のみならず、制度宗教をも対象として宗教－世俗の関係を問う必要がある。このように、本研究の課題の核心には、「宗教とは何か」という大きな学術的「問い」がある。

この「問い」に至った学術的背景は、大きくは以下の二つである。

### （1）仏教の人類学研究

人類学の仏教研究は、E.リーチが「実践宗教」という視点を提唱したことに始まり、1960 年代以後に本格的に展開された（Leach 1968）。その課題は、従来の仏教学者による文献研究に対して、民衆の日常的な仏教実践を解明することであり、東南アジア大陸部の上座部仏教社会が主たる研究の舞台とされてきた。しかし 1980 年代後半からは、①社会変動に伴う仏教実践の変容（新仏教運動や瞑想の大衆化など）、②地域固有の仏教実践の実態などの解明が主題とされる傾向にある。研究テーマはトピックごとに細分化され、また国・地域によって志向性に偏向が生じており、大きな問いに向き合うことができない状況に陥っている。

### （2）宗教－世俗の人類学研究

この状況を切り抜けるために、本研究が出発点とするのは、T. アサドの一連の研究である（Asad 1986、アサド 2004; 2006）。アサドは、①「宗教」と「世俗」の範疇を本質主義的に捉え、また両者を二項対立的に対置する視点を批判し、②教義と実践の関係を規律＝訓練として捉えることの重要性を提示した。しかし、それに続く研究は、①系譜学的手法にのっとって、宗教概念にまつわる西洋近代的な諸価値を相対化するものの、言説のレベルでの分析にとどまっているか、あるいは②知識の学習過程に着目して、自己修養論などを展開するものの、議論の射程が「敬虔な」「宗教的な」ものに閉じてしまっているか、である。それゆえ、現状では、制度宗教を対象にして、「宗教」と「世俗」の関係を問うための方法が十分に探求されていない。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、ミャンマー・シャン州からタイ都市部の仏教寺院へ流入する「難民」の生活実践に焦点をあてて、現代社会における宗教－世俗の境界（インターフェイス）が編成される過程を民族誌的に明らかにすることである。

近現代の社会変動のなかで宗教－世俗の関係を問うことは、宗教研究の主要な課題の一つであるが、先行研究は、宗教－世俗の境界がどのように編成されるのかを実体のレベルで把握できないという問題を抱えてきた。この問題を解決するために、本研究は、宗教－世俗の境界が編成される現場として、寺院という物理的な空間に着目する。その上で、①寺院という空間における「難民」の生活実践、②「難民」の生活実践が寺院空間の持続と変容に及ぼす影響、という二つの段階に分けて宗教－世俗の境界の編成過程の民族誌的な記述をおこなう。記述をとおして浮かび上がる、価値、制度、関係性の特質を析出し、現代社会における宗教の理解に貢献する。

本研究で「難民」に焦点をあてるのは、寺院にとっても、社会にとっても両義的な存在だからである。対象のシャン「難民」は、1990 年代以後、ミャンマー国内の民族紛争やタイ国内の経済発展を背景として、タイ社会に大量に流入した。彼らはタイ社会において、マジョリティから「よそ者」とみなされる傾向がある一方で、タイ仏教の存続にとっても看過できない存在でもある。出家者数が減少しつつあるタイ社会において、シャン「難民」の出家は、それが彼らの生存上のニーズの充足を動機とした一時的な出家であったとしても、教義を正統に継承する出家者コミュニティを維持・再生産するうえでは重要な意味をもつ。彼らが、寺院という空間で、居住、労働、育児などのさまざまなニーズを充足させながら、どのようにタイ社会を生きているのかを描くとともに、そのような彼らの実践がタイ社会の中心的な制度である仏教にどのように影響を及ぼしているのかを捉える。

## ３．研究の方法

主たる研究方法は、対象社会におけるフィールドワークである。また、フィールドワーク（観察調査、インタビュー調査、および文献調査）で得られた情報を分析し、先行研究と関連付けて考察をおこなった。その成果を、国内外の学会や研究会で報告をおこなうとともに、ディスカッションをつうじて考察を深め、一部を論文として発表した。

各年度の研究活動の概要は以下のとおりである。なお、研究期間の 2 年目にあたる 2019 年度終盤から、世界中で新型コロナウィルス感染症の影響が急速に拡大したことに伴い、3 年目にあたる 2020 年度以降は、当初の研究計画を大幅に修正せざるを得なかった。また、そのために、研究期間を 4 年間から 5 年間へと延長した。

① 1年目（2018年度）

- 目標は、タイ国内の寺院におけるシャン「難民」の全体像の把握すること。
- 6月：日本文化人類学会第52回研究大会（弘前大学）にて口頭発表。
- 8月：タイ・バンコクにて約2週間のフィールドワークを実施（タイ国内におけるシャン人の移住に関する文献資料と、タイの寺院運営をめぐる法制度に関する文献資料の収集）。
- 2月：タイ・バンコクにて約2週間のフィールドワークを実施（シャン人が多く参拝に集まる寺院（複数箇所）ならびにシャン人の互助団体を訪問し、シャン人出家者と在家者を対象に、バンコクにおけるシャン人移住の歴史と現状に関するインタビュー調査）。

② 2年目（2019年度）

- 目標は、寺院におけるシャン「難民」の生活実践をミクロなレベルで解明すること。
- 8月～9月：タイ・チェンマイにて約2週間のフィールドワークを実施（チェンマイ市内の全寺院数の約4分の1にあたる寺院を訪問し、「難民」の居住実態に関するインタビュー調査。また、シャン人の生活支援をおこなうNGO組織を訪問し、「難民」の居住実態に関するインタビュー調査）。
- 2月：タイ・バンコクにて約10日間のフィールドワークを実施（シャン人が多く参拝に集まる2つの寺院で、寺院とシャン人との関わりの歴史と現状に関するインタビュー調査）。

③ 3年目（2020年度）

- 新型コロナウィルス感染症の拡大による移動制限のため、タイやその他の国々でのフィールドワークも国際学会での口頭発表もかなわなかった。そのため、これまでの2年間にタイで収集した調査データの見直しと、理論的考察を深めるための先行研究の検討に取り組んだ。

④ 4年目（2021年度）

- 前年度に引き続き、新型コロナウィルス感染症の影響による移動制限のため、タイやその他の国々でのフィールドワークを再開できなかった。そのため、国内外の学会や研究会で、これまでの研究成果の中間報告をおこなうとともに、考察・分析を精緻化するための先行研究の検討に取り組んだ。
- 8月：the 12th International Convention of Asian Scholars (ICAS12、オンライン)にて、タイ・チェンマイの都市部の寺院におけるシャン「難民」の出家が僧院教育のあり方に与える影響ついて報告。

⑤ 5年目（2022年度）

- コロナ禍による影響や政情不安が長期間に及ぶなか、タイを中心としてドイツおよびミャンマーでフィールドワークを実施する構想を見直し、日本での調査を開始した。
- 4月：the 14th International Conference on Thai Studies (ICTS14、オンライン)にて、タイ社会における仏教組織のアカウンタビリティについて報告。
- 4月、6月、9月、1月に日本・長野のタイ系寺院で計4回のフィールドワークを実施（日本におけるタイ系寺院の展開の歴史と現状、仏教組織の運営上の課題、在日タイ人と寺院との関わりなどについてインタビュー調査、タイ人出家者と在家者のライフヒストリー収集など）。

## ４．研究成果

### 1）本研究によって明らかにしたこと

まず、タイおよびミャンマーの両国における政治的経済的な変化を背景として、1990年代以降、タイ都市部に大量のシャン「難民」が流入する現状がある一方で、これまで大規模なシャン人集住地域は形成されず、彼らの多くは都市の低賃金労働者として分散して居住していることがわかった（2018年度および2019年度フィールドワークより）。バンコクの、シャン人が多く参拝に集まる2つの寺院では、彼らが、①移住先に「自分たちの場所」を創出するために建立した、②儀礼への参加をとおして、故地とのつながりを再確認し、エスニック・アイデンティティを形成している、といったことが明らかになった。彼らにとって寺院は、儀礼や年中行事を中心とした宗教実践の場であり、また標準タイ語の教育／学習の場でもあった。また、バンコクでは宗教行政の介入や個々の寺院運営の方針を理由として、在家者の寺院居住が困難であることも分かった（2019年度フィールドワークより）。

これらのことは、地理的にミャンマー・シャン州に隣接し、歴史的にシャン人が多く居住しているタイ北部・チェンマイの都市部においても概ね同様の傾向がみられた。しかし、チェンマイ市内の複数寺院でおこなったインタビュー調査からは、僅少とはいえ在家者の寺院居住の事例を確認することができた。これらの事例は、エスニック・グループごとの棲み分けによって「シャン寺」としての様相を呈している寺院においてではなく、異なる背景をもった移民・難民が住みつくことに寛容な姿勢を示している寺院において観察された（2019年度フィールドワークより）。

なお、バンコクおよびチェンマイ都市部のどの寺院においても、近年は出家者（とくに沙弥）

の減少が顕著であり、シャン「難民」の出家も全体的に減少していることも明らかになった。
　これらのことから、タイ都市部におけるシャン「難民」の寺院居住の実践は、都市の規模や寺院運営の方針の違いなどに左右されつつも、寺院がもつ庇護性のもと、法制度の隙間をかいくぐって展開されていると考えられる。また、そのような彼らの実践が、タイ社会の中心的な制度である仏教（出家者や寺院）に関する法制度や規範をつくりかえる契機となっていることも指摘できるだろう。
　この成果を他地域の文脈において検討するため、日本国内のタイ系寺院で計 4 回の現地調査をおこなった（2022 年度フィールドワーク）。調査から明らかになったことは、日本におけるタイ移民の増加に伴って過去約 20 年間に急増しつつあるタイ系寺院は、宗教行政による管理が十分には行き届かない環境下にある。にもかかわらず、出家者を除いて、「難民」や不法滞在者などの在家者による寺院居住の実践はほとんど確認できなかった。その背景には、日本社会がほとんど「難民」を受け入れていないことや、寺院の空間が物理的に狭小であることなどがある。しかしそれ以上に重要なのは、宗教行政による管理が十分には行き届かないがゆえに、個々の寺院が、布施として集まるモノやカネの使用や管理をめぐって、自律的にアカウンタビリティを果たすよう求められていることである。そのため、在家者による寺院居住は「私的」に過ぎる実践として回避される傾向にある。
　タイにおいても、1980 年代後半からの急速な経済発展に伴い、寺院をはじめとする仏教組織に集まる布施（とりわけカネ）が量的に増加したため、布施をどのように獲得・使用するかが組織にとっても社会にとっても本質的な課題となっている。宗教行政は、度重なる「宗教とカネ」の問題を解決すべく、寺院会計の透明化・説明責任の強化を試みており、それによって一定程度は「監査文化」が形成されつつある。他方で、個々の寺院のレベルでは、法的な知識やメディアの技術を駆使して、より良い布施をおこないたい都市住民らのニーズを汲み取るような、アカウンタビリティを果たす独自の方法を探求していることが明らかとなった（2020 年度および 2021 年度研究活動より）。
　以上のことから、タイ都市部におけるシャン「難民」の寺院居住の実践は、寺院を取り巻く多様なアクターの関わり合いと、不断に生成する「宗教に関する言説」（＝社会において宗教がどうあるべきか）の作用によって決定づけられており、世界規模でグローバリゼーションが進行する広い文脈に位置づけて理解する必要がある。

2）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト
　第一に、人類学の宗教研究に対して、実体のレベルで宗教－世俗の関係を把握し分析するための、新たな方法を提唱した点に意義がある。先述のように、アサド以降の人類学の宗教研究は、宗教－世俗を所与のものとせず、かつ「宗教とは何か」という問いに対する答えを考究することが求められている。しかし現状ではその方法は模索の途上にある。それに対して本研究が提唱する方法は、物理的な宗教空間を設定することで、人びとの生活実践に民族誌的にアプローチし、実体のレベルで宗教－世俗の関係をとらえることを可能にする。
　第二に、宗教空間がもつ庇護性に関して、人類学的な比較研究の分析枠組みを提示しうる点に重要性がある。難民のみならず、移民、障害者や貧者などが寺院や教会といった宗教空間に住み着くことは、通時的にも共時的にも普遍的に観察される。また、近年のヨーロッパにおける難民の増加と、それに伴う教会アジール活動の活性化は、宗教空間がもつ庇護性に対する関心を再び集めている。本研究は、あくまでタイとミャンマーの二つの国家のはざまを生きるシャン「難民」の生活実践をとおして、宗教空間に特徴的な庇護性の持続・変容のメカニズムを明らかにするものである。しかしその成果は、今後、欧米やアジア各地の宗教空間の庇護性に関する比較研究を展開する際の参照析枠組みを提示する点で有意義である。
　第三に、本研究は人類学と宗教社会学とを架橋し、分野間の対話の可能性を開拓する点にある。近年、人類学の宗教研究は、仏教の人類学研究がそうであったように、国や地域によって研究テーマが細分化し、偏重する傾向にある。他方で、宗教社会学は、宗教復興現象を前に世俗化論に対する批判が集まったものの、その批判の先に新たにポスト世俗化論が展開している。現状では、主に非西洋社会を舞台に「伝統的な」宗教実践を対象とする人類学と、「新しい」宗教実践を対象とする宗教社会学とのあいだにギャップが横たわっている。しかし、近現代の社会変動のなかの宗教－世俗の関係を問う本研究は、宗教社会学とも問題関心を共有し、対話をとおして人類学の視点や方法の可能性と限界を検討することを可能にする。

3）今後の展望
　2018 年度から 4 年間の予定で開始した本研究プロジェクトは、2019 年度末以来、新型コロナウィルス感染症の影響によって研究に大幅な遅れが生じたため、計画を見直すだけでなく、期間を 1 年間延長することで完了した。しかし、計画の変更にともなって、研究期間内に公開できたのは研究成果の一部にとどまっている。今後は、得られた成果を学術雑誌等への投稿論文としても発表することで、学術的にも社会的にも広く知見を共有することに努めたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>OKABE, Mayumi. |
| ２．発表標題<br>Rethinking the "the Religious" in Contemporary Thailand: Religious Giving, Accountability, and Globalization |
| ３．学会等名<br>The 14th International Conference on Thai Studies (ICTS14)（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年～2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>OKABE, Mayumi |
| ２．発表標題<br>The Interface between the Religious and Secular: Changing Buddhist Monastic Education as a Source of Public Morality in Contemporary Thailand |
| ３．学会等名<br>the 12th International Convention of Asian Scholars (ICAS12)（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>岡部真由美 |
| ２．発表標題<br>現代タイの上座仏教僧による開発実践からみた宗教と世俗の境界：チェンマイ近郊部におけるヘルスケアの現場を事例として |
| ３．学会等名<br>日本文化人類学会第52回研究大会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

〔図書〕　計9件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>岡部　真由美 | ４．発行年<br>2021年 |
| ２．出版社<br>中京大学先端共同研究機構文化科学研究所 | ５．総ページ数<br>199 |
| ３．書名<br>「大学教育と博物館：タイにおける海外博物館研修を事例として」中京大学先端共同研究機構文化科学研究所博物館研究プロジェクト（編）『大学教育と博物館』（中京大学文化科学叢書22） | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>岡部　真由美 | ４．発行年<br>2021年 |
| ２．出版社<br>丸善出版 | ５．総ページ数<br>716 |
| ３．書名<br>「死と食」野林厚志ほか（編）『世界の食文化百科事典』 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>岡部真由美 | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>ナカニシヤ出版 | ５．総ページ数<br>328 |
| ３．書名<br>「都市に生きる場所－タイにおける「寺住まい」の実践からみる社会編成－」森明子（編）『ケアが生まれる場－他者とともに生きる社会のため－』 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>岡部真由美 | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>春風社 | ５．総ページ数<br>448 |
| ３．書名<br>「開発実践からみた宗教と世俗の境界－現代タイの上座仏教僧によるヘルスケア活動の現場から－」石森大知・丹羽典生（編）『宗教と開発の人類学－グローバル化するポスト世俗主義と開発言説－』 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>岡部真由美 | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>丸善出版 | ５．総ページ数<br>832 |
| ３．書名<br>「寺院と教育」信田敏宏ほか（編）『東南アジア文化事典』 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>岡部真由美 | 4．発行年<br>2019年 |
| 2．出版社<br>丸善出版 | 5．総ページ数<br>832 |
| 3．書名<br>「水かけ祭り」信田敏宏ほか（編）『東南アジア文化事典』 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>速水 洋子ほか18名 | 4．発行年<br>2019年 |
| 2．出版社<br>京都大学学術出版会 | 5．総ページ数<br>596 |
| 3．書名<br>東南アジアにおけるケアの潜在力 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>森 明子ほか14名 | 4．発行年<br>2019年 |
| 2．出版社<br>ナカニシヤ出版 | 5．総ページ数<br>328 |
| 3．書名<br>ケアが生まれる場 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>藏本 龍介 | 4．発行年<br>2023年 |
| 2．出版社<br>法藏館 | 5．総ページ数<br>350 |
| 3．書名<br>宗教組織の人類学 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
| --- | --- |